

# この世界はいかにあるか、この世界でいかに生きてゆくべきか

秋山 知宏

## 要旨

本稿は、2019年9月から2020年1月におこなった己事究明に基づくものである。本稿の動機は、人類は今まさに文明的岐路に立っているという認識である。これからの文明はいかにあるべきなのかという問題を考察するに当たって問うべき根本問題は、「この世界はいかにあるか」と「この世界でいかに生きてゆくべきか」であると私は考えている。本稿では、この2つの問題を考察し、これからのに向けての構想を明らかにする。

## 1. はじめに

本稿の動機は、人類は今まさに文明的岐路に立っているという認識である。これまでの文明の進展は、「人類革命」「農業革命」「都市革命」「精神革命」「科学革命」という、5つの変革期に区分される（伊東, 2016）。17世紀に起こった「科学革命」は、その後の産業革命や今日の情報革命を可能にしたことで多くの便宜を人類に与えてきたが、同時に核兵器や原発を巡る問題や環境問題など、地球や人類の未来を脅かす問題を引き起こしてきた。人類の未来は単に「科学革命」「産業革命」「情報革命」というこれまでの流れの延長線上だけにあるのではなく、新しい文明の変革が今や必要とされている。これからの文明はいかにあるべきなのか。

この問題を検討するために問うべき根本問題は、「この世界はいかにあるか」と「この世界でいかに生きてゆくべきか」であると私は考えている。世界と自己の探究が必要である。私たち一人ひとりの生き方が変わらなければ、文明は変わらない。自己観と世界観を深めずして、生き方を検討できない。試行錯誤の果てに私がとった方法は、①己事究明、②諸学の統合、③諸経験の統合という3つのプロセスの繰り返し運動である。本稿では、私の試行錯誤の経験からみえてきたことを共有したい。

## 2. この世界はいかにあるか

我々は何のために生まれてきたのか。我々の由来を振り返ると、約138億年前に遡る<sup>1)</sup>。この宇宙は「無のゆらぎ」から生まれたと考えられている（Vilenkin, 1982）。「無のゆらぎ」とは、物質も空間も、時間さえもない中で、ごく小さな宇宙が生まれては消えている状態のことである。そのうちのひとつが何らかの原因で消えずに成長したのが、私のいる宇宙だという考えである。この宇宙は、ただ一つしか存在しないとこれまでは考えられてきたが、マルチバース（多宇宙）という巨大な構造のごく一部であるという考え方が、今や多くの宇宙論研究者が受け入れている。ただし、それはまだ仮説の段階にある。

このマルチバースの考え方は、宇宙がある条件を満たすと指数関数的に膨張することを示す、インフレーション理論から生まれた。インフレーションと呼ばれるこの急膨張の間に、性質の異なる宇宙が次々と生まれる。沸騰するお湯の中に次々と新たな気泡が生じるようなイメージである。これらの宇宙は「泡宇宙」と呼ばれている。異なる性質をもった宇宙が無数（ $10^{500}$ 種類かそれ以上）があると計算されている。我々の宇宙はそうした泡の1つであり、その外側には無限に多くの泡が存在すると考えられている。この描像によると、我々がかつて自然の基本法則（例えば、宇宙を構成する素粒子の種類や性質）だと考えていたものは、それぞれの宇宙で異なると考えられる。

この宇宙の誕生直後は、真空の「自発的対称性の破れ」<sup>2)</sup>によって、真空のエネルギーに満ちていたと考えら

れている。真空は何もない無と思われがちであるが、そうではなくて、素粒子のペアが生まれたり消えたりしている。それを「ゆらぎ」と呼ぶ。そういうわけで、真空とは、決してエネルギーがゼロの空間ではない。物理学における真空の定義は、エネルギーの最低状態なのである。真空のエネルギーに満ちていた空間は互いに押し合い、急膨張し始める。この急膨張をインフレーションと呼ぶ。宇宙は、この莫大なエネルギーで加熱され、超高温・超高密度の火の玉となる。これがビッグバンの始まりである。

宇宙誕生直後の約3分間に、この宇宙に存在する基本的な力と、我々のまわりにあるすべての物質のもとが生まれた。超高温の宇宙は、急激に膨張しながら冷えていく中で、クォークと呼ばれる素粒子が集まって、陽子と中性子をつくった。さらに、陽子や中性子が結び付き、原子核をつくった。そして、原子核と電子が結び付き、原子をつくった。これらが銀河や太陽系を形成してきた。

そして、生命が誕生した。原子がたくさん集まって今度は分子をつくった。これにも結び付きの力が働いている。分子がどんどん大きくなると高分子になってタンパク質になり、それと核酸が結びついて生物ができる。生命が誕生したのは、地球上の水の大部分が蒸発した全球蒸発という非常に熱かった約38億年前のことである。そして、細胞とミトコンドリアが結びついて、共生進化していく。約7億年前に全球凍結が起こり、そこで生き残った真核生物が集まって、多細胞生物が誕生したと考えられている。その果てに人類が誕生したのである。

このように我々の由来を振り返ってみると、宇宙の始まりから現在に至るまでが、ひとつながりの共働態だと言える。宇宙の始まりから現在に至るまで、素粒子が結び付き、細胞が結び付き、生物が結び付き、人間が結び付き、その都度、新しい関係を生成してきた。進化というと、これまでは優勝劣敗で強いものが弱いものを亡ぼしてそれに取って代わるというイメージがあったが、実際はそうではない。進化とは、万生万物が内から開いていくことである。語源もそうになっている。そして、共生進化 (Symbiotic evolution) というのは、困難な環境に直面したときに、互いに長所を出し合い、助け合って新しい発展をつくっていくというものである。しかも、地球と生物が共に進化してきたのである。これを共進化 (co-evolution) という。このように、万生万物は、それぞれの本来のはたらきをしあってきたのである。本来とは、まこととも表され、穢れがないこと、囚われがないことを意味する。囚われがないということは、底も無く、天井もない、無限の広がりをもっているということである。この無限に広がる共働態こそが、〈世々代々のまことのはたらきあう共働態〉だと私は考えている。

この〈世々代々のまことのはたらきあう共働態〉の長い歴史の中に、今日の我々は存在しているのである。我々人間もこの〈世々代々のまことのはたらきあう共働態〉の一部であり、これまでの共働態の全てが我々一人ひとりの中にあるのである。万象万物は共通の起源をもっており、この宇宙は共通の活動の場である。この見地に立てば、本来みながこの〈世々代々のまことのはたらきあう共働態〉の仲間だと気づき、みなが存在が尊いと気づくことができる。しかし、人類は、この〈世々代々のまことのはたらきあう共働態〉を破壊しつつある。「全体的破壊を避けるという目標は、他のあらゆる目標に優位せねばならない」(アインシュタイン原則)。「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」(宮沢賢治)。このようなことを考えれば、我々の生きる目的は、まことを生き抜くこと、〈世々代々のまことのはたらきあう共働態〉を継承・発展させて、世々代々の幸福を実現することであると言えるのではないか。これは科学とも矛盾しないし、宗教とも矛盾しない。過去のいかなるものも否定しない。世々代々のまことを生き抜くことが、これからの文明をつくっていく根源になるのではないかと考えている。

### 3. この世界でいかに生きてゆくべきか

本節では、この世界でいかに生きてゆくべきか、世々代々のまことを生き抜くとはどういうことかという問いに対して、これまでの人類の種々の経験を受け取り直しながら総合的に考察していきたい。

まず、人間の脳の特徴を考えたい。人間の脳には、4つの特性があると考えられる。第1は、表象をつくるという特性である。心の対象となる像をつくり、世界を認識する (knowing) という特性である。第2に、認識した対象に対して、記憶と照合し、感情 (feeling) をつくるという特性がある。第3は、感情をもとにして、意志

をつくる (willing) という特性である。これは、何かをしようという、行動に関わる。ここまでが、知情意に相当する。第 4 に、表象と感情と意志を統合して、全体として他者をつかみとり、それを昇華するという特性がある。思考して (thinking)、判断し (judging)、意味づけたり (implicating)、価値づけたり (valuating)、思いやったり (considering) する。このように、脳は、自分と他者とのつながりや、世界とのつながりをつくりあげる機能をもっている。ただし、自他を分別するという脳の根本的な特性は、自他の関係性において新たな文化をつくる根源になる一方で、種々の囚われや執着の原因にもなる。

では、これまで人類は、どのような囚われや執着を経験してきたのか。自我への囚われ、感情への囚われ、欲望への囚われ、知識への囚われ、特定の価値観への囚われ、組織への囚われ、立場への囚われ、生きることへの囚われなど、挙げれば切りがない。とりわけ近代以降、これらの囚われのほとんどが制度化され、我々の意識構造に刷り込まれてしまっている。こうした種々の囚われの中で根本的な囚われが、自我への囚われである。それと連動して、現代社会においてやっかいな囚われは、立場への囚われである。宗教家、政治家、経営者、学者、労働者、消費者、色々な立場がある。何にも囚われていないと言い切れる人がいるだろうか。脳の特性に照らせば、絶対にいないのである。

では、何かに囚われるとどうなるのか。悩みや苦しみの感情に囚われれば、自分という殻の中に閉じていくようになる。これは、不幸なことだし、本来の自分の潜在能力を引き出していないという意味でもったいないことでもある。一方、特定の知識や価値観に囚われれば、自分が正しいと思うことを絶対化するようになり、傲慢になる。これは、自分だけでなく、他者も破壊することになる。立場に囚われると、自覚か無自覚かにかかわらず、特定の立場としてはたつきしなくなる。このように、何かに囚われると、自他の可能性を閉ざすばかりでなく、自他を否定したり、破壊したりすることにつながるのである。

では、囚われを超えるとどうなるのか。囚われを超えることの意義は何か。自我の自分を超越すると、本来の自己に気づき、それが宇宙の根理と同一であることを実感する。自と他の合一に気づき、人間と自然、物質と精神、科学と宗教の対立など、様々な対立が本来はないことを実感する。そして、死の恐怖などの感情も克服する。だから、自ずと、悩みや迷いは、なくなる。何も問題にならなくなるからである。この囚われのない生き方が本当の幸せなのだとは私は実感している。幸せは、本来は目の前にはあるはずなのに、何かに囚われていると気づけない。究極の救世主は自分自身である。〈梵我一如あるいは汝はそれなり (tat tvam asi)〉〈悟り〉〈回心 (metanoia)〉〈解脱 (moksha)〉〈無 (wu)〉などは、このような気づきの古典的な名称である。種々の囚われを超えると、自我を超えて、立場を超えて、国境を超えて、世代を超えて、本来の自己を開き、はたらきあっていくようになる。これが〈世々代々のまことのたつきあう共働態〉である。

では、どうしたら囚われを超えられるのか。人類が発見した最初の方法は、哲学・宗教・思想の実践である。紀元前 13 世紀から起源後 7 世紀にかけて、イランではゾロアスター教、インドではバラモン教、ヒンドゥー教、ジャイナ教、仏教、中国では儒教、日本では神道、ギリシアでは哲学、イスラエルではユダヤ教、キリスト教、サウジアラビアではイスラム教が生まれた。これらは、人類が初めて経験した心の中の変革である。方法はそれぞれに異なるが、共通性は何かといえば、自己超越のための修道生活の実践である。

その後、宗教は多様化していき、芸道や武道にも派生していった。これが、人類が発見した囚われを超える、2 つ目の方法である。芸道や武道の修業を通して道を究めれば、宗教的实践を通しておとずれる自己の変化と同様の変化が生じる。

そして、人類は、各宗派に囚われるという経験をした。各宗派を絶対化したことによって、種々の対立を生み、時には暴力や破壊につながった。その反省から人類は、近代になって寛容という態度を生み、種々の諸宗教対話を実践するようになった。とりわけ 1893 年のシカゴ万国宗教会議以降、他の宗派にも真理があり得るのだという考えが徐々に高まってきた。これは多くの人々にとって全く新しいことだった。そして、1965 年の第 2 バチカン公会議における「キリスト教以外の諸宗教に関する教会の態度についての宣言」(Nostra aetate) によって、諸宗教対話の花が開いた。1970 年には、第 1 回世界宗教者平和会議 (World Conference on Religion and Peace; WCRP) が、京都国際会館で開催された。その大会宣言の中に、こういう言葉がある。「我々は、しばしば、われらの宗教的理想と平和への責任とに背いてきたことを、宗教者として謙虚にそして懺悔の思いをもつ

て告白する。平和の大義に背いてきたのは宗教ではなく、宗教者である。宗教に対するこの背反は、改めることができるし、また改められなければならない」。このように、宗教者も囚われを超えようと変わってきている。私は、諸宗教対話や種々の宗教的実践を通して、それら宗教者に通底するものは、囚われのないまことだと実感している。囚われを超えていくという自覚をもてば、日々の生活も仕事も何もかもが、囚われを超えていく実践になるはずである。

さて、囚われを超える方法は伝統的には宗教的実践であるが、これらは前近代の先哲たちが直観でとらえた智慧であって、永遠に真理であるというような固定的なものではない。人類が発見した第3の方法が科学である。西ヨーロッパのルネサンスにおいて成立した市民社会という共通のつぼの中で、ギリシア以来の数学的知識をもつ学者層が、中世末期以来の実践的技術をもつ職人層の営みに注目した。そこから学者と職人が合流し、ギリシア以来の数学的方法と、実験的方法とが結び付き、科学的方法が成立した。科学とは、仮説を立て、実験によって検証することである。それ以降、世界の認識に関する知見が累積してきた。我々が認識する世界は森羅万象のごく一部であるが、それでも我々の世界観は広がり続けている。ただし、科学は世界観の囚われを超えていく方法だということに注意しなければならない。科学が問うてきたのは「この世界がいかにあるか」である。認識の客観性を保つための価値中立という原則を根拠として、ほとんどの科学者が、主として哲学・宗教・思想で問われてきた「いかに生きてゆくべきか」という問題を無視してきた。近代以降、科学と宗教は別々の道を歩んできた。このことを受け取り直せば、両方を行っていくという道を見出すことができる。その道は、科学者や宗教者だけの特権ではなく、万人に開かれている。その道を歩めば、新しい叡智が生まれるのではないか。囚われを超えていくという自覚をもって科学や宗教や他のあらゆることを実践していけば、万人が未来をひらいていく道になるはずである。

囚われを超える方法は、今や宗教や科学だけでなくことも明らかになっている。人類が発見した第4の方法は、臨死体験である。文字通り、死に臨む体験である。本質的には、哲学・宗教・思想あるいは芸道や武道を通して経験することと同じである。臨死体験には個人差はあるが、体外離脱、広大なトンネルを抜ける体験や光体験、人生回顧や時空を超えた領域を訪れる体験などが顕著です。臨死体験後に起きる変化は、死後の世界の確信、生命への尊敬の念の強まり、他者への思いやりの増大、死の恐怖の克服、自己超越、意識の生まれ変わり（輪廻転生）の確信、サイキック能力の開花などを挙げられている（Moody, 1975a; 1975b; Ring and Valarino, 1998）。こうした臨死体験は誰もが経験するものではないが、臨死体験を広く捉えれば、それは真剣に死と向き合うことである。病気になった時のこと、災害に遭った時のこと、事故や事件など災難に遭った時のこと、会社が経営破綻した時のこと、莫大な借金を抱えてしまった時のこと、失業した時のことなどを思い起こしてほしい。これらを臨死体験と同じ契機にすることができる。これらの経験がなければ、「今夜死ぬかもしれない」、そう思って生きてみてほしい。間もなく死ぬ自分を意識すれば、他人を出し抜くとか、勝つか負けるとか、そんなことはなんの意味もなくなる。間もなく死ぬ自分を意識すれば、自分が生かされていることへの感謝の気持ちだけになる。

さて、囚われを超える方法についての最後に、〈受け取り直し〉を取り上げたい。私は、この〈受け取り直し〉が、最も広がりをもつのではないかと考えている。受け取り直しには、3段階がある。第1段階は、〈己事究明〉である。これは、「私は何者か」を深める自己探究である。これまでの人生を振り返り、色々な問いを自分に立てていく。例えば、「自分にとっての成功体験は何か」「自分はなぜ成功体験と思っているのか」「成功体験と思っていることが、本当に成功体験なのか」「自分にとっての負の経験は何か」「自分は何に囚われているのか」。このように自分に対する問いを考察していくことによって、自分で気づいていない「本来の自己」に気づくことができる。

第2段階は、〈受け取り直し〉である。第1段階で囚われに気づいたら、「その囚われの経験を、どう生かせるか」「それに囚われていなかったら、どのような可能性があるか」を問うことである。囚われをひっくり返していけば、「あつ、もっと可能性があるではないか」「自分が囚われていたのはこんな小さなことだったのか」という具合に、意識が白紙化していく。意識が白紙化した状態で、「究極に大きな目標は何か」と自分に問う。この受け取り直しを日々行っていくことによって、自他ともに青天井に発展していける可能性を実感できるよう



になる。

第3段階は、受け取り直しの教材化である。第2段階で終わりにすると、その気づきを自分だけのものにとどめること（気づきの私物化）になってしまう。第3段階は、受け取り直しの経験を教材化して、世界と共有していくことである。そうすることによって、私的な経験が万人に活かされる可能性が生じる。

これらの繰り返しを日々行っていけば、「謙虚に囚われを超えていく生き方」を自他ともに実践できるようになる。私は、もちろん、囚われを否定しているわけではない。その囚われの経験を受け取り直して、本来の自己を開いていけば、その囚われの経験が生きていくのである。アルファベットの X の形のように、下は底なしで、上は青天井、横の超越も無限大である。

#### 4. これからに向けて

これまでの万象万物の経験を経て、私は、一つの仮説に辿り着いた。それは、この〈世々代々のまことのはたらきあう共働態〉は目に見える現実世界だけにとどまらないというものである。故湯川秀樹博士が晩年に提唱した素領域理論を発展させれば、私が祖母に救われた臨死体験のような〈現実世界と非現実世界（魂、霊や神仏と表象される形而上学的世界）のつながり〉を実証できる可能性がある。そして、「現実世界と非現実世界とのつながり」を解明できれば、それは世のためになるはずである。なぜなら、解明の先に見えてくる世界像が愛に包まれているからである。まことのはたらきを行う人は良縁に恵まれることも説明できるし、霊や神仏とも共働する世界も見えてくるし、人智を超えた力を借りられるようになる可能性もある。そして、知と徳を一致させていくことによって、科学と宗教のそれぞれの限界を超え、知識を叡智に変えていけるはずである。すなわち、叡智革命につながれる可能性がある。

素領域理論は、量子力学や場の量子論を超える理論である。なぜなら、素領域構造を数学的に仮定すれば、そこから量子力学や場の量子論の方程式が導かれるからである。ここで、図1のように、完全に調和していて、見えない非現実世界を仮定する。そこに何らかの力が働くと、ヒビが入り、膜状になり、楕円形の泡のようになる。つまり、完全調和が破れた部分から、泡がどんどん生まれてくる。この一つひとつの泡が、素領域であり、目に見える現実世界である。素粒子というのは、素領域の中にしか存在できず、泡から泡へと飛び移っている。

物質も人間も素粒子でできているわけだから、この仮説に従えば、物質や人間の中にも、数々の素領域があ

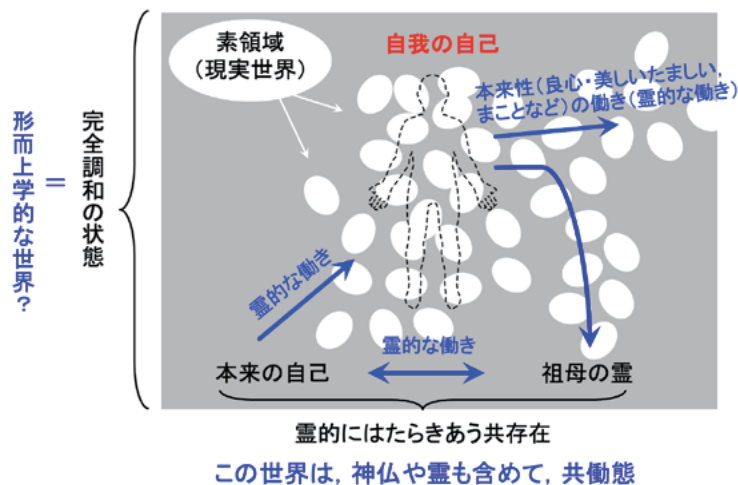


図1. 現実世界と形而上学的世界とのつながりの仮説の概念図。

ると言える。そして、素領域の外側には完全調和があるわけだから、完全調和の一部が物質や人間の中にもあることになる。我々は、三次元空間を自由に動いていると思っているが、この仮説に従えば、素領域から素領域に飛び移っているだけである。従来の物理学は目に見える泡の中しか見ていないことになる。

私の仮説は、「この完全調和が形而上学的な世界と言える可能性があるのではないか」ということである。つまり、「我々が神仏や霊と表象するような形而上学的な存在は、この完全調和のこと、あるいはこの完全調和に存在すると言える可能性があるのではないか」ということである。完全調和の状態はひとつながりだから、すべての情報があるとされるアカシックフィールド（情報場）はこの完全調和に等しいのかもしれないし、唯識や大乘起信論という阿頼耶識もこの完全調和でつながっているのかもしれない。

そう考えると、私の臨死体験も説明できる。完全調和には祖母の霊と、〈囚われのない本来の自己〉（自分の魂？）がいて、素領域には自我の自己がいると考える。完全調和はひとつながりだから、祖母の霊と母の〈本来の自己〉と私の〈本来の自己〉は、常に互いに霊的にはたらきあう、共存在の関係と考えられる。私が臨死体験をした時、私の意識はなかった。まさにその時に、離れたところにいた母は、それ以前に亡くなった祖母の夢をみていた。母の夢の中で、祖母は「葬式はしなくていい、大丈夫」と繰り返し言っていたという。ということは、私は、母を通して祖母の霊から、霊的なはたらきを受けていたと考えられる。

もしかしたら、自我の自己は、形而上学的な世界に働きかけることもできるのかもしれない。自我の自己は、本来の自己に気づかなければ自我のはたらきに終始するが、本来の自己に気づけばつまり囚われのない本来性を働かせれば、形而上学的な世界に働きかけることもできるのではないか。こう考えれば、奇跡と呼ばれる現象も説明できる。そして、我々が神仏や霊と表象する存在も含めて、この世界は共働態だと言える。「本来の自己に目覚めよう」「霊性に目覚めよう」というメッセージが成り立つのではないかと思われる。

以上はあくまでも仮説である。ゆえに批判的に考えてほしい。私自身も批判的に考えていくつもりである。今後は、理論物理やモンテカルロシミュレーションや加速器実験などで検証していく計画である。

## 5. むすびに

21世紀以降の高エネルギー物理学、ナノサイエンス、量子コンピュータなどの急速な発展に鑑みれば、現時点の社会の常識は悉く覆されていく。インターネットもなくなるだろう。私は、霊的な通信や、マクロレベルの量子テレポーテーションを具現化したいと考えている。ピラミッド型の社会の裾野にいる我々一人ひとりが己を開いていくことによって、社会は構造的に転換するはずである。

私は、何事を実践するにも、その根本には己事究明を置くべきだと考えている。いかなる実践の前提には、自己革新がなければならないと考えている。そして、本来性を追及し続けながら、どこまでも謙虚に囚われを超え続ける生き方が、人間本来の幸せな生き方であり、世々代々の幸福への道だと私は考えている。ただし、それが真理だとは思っていない。永久に未完成である。絶対の真理はない。これが真理だと言ってしまうと、それは傲慢になる。だから、その時点での本来性を尽くして実践し、その都度、受け取り直して生まれ変わっていく。私は、生涯、この繰り返しを行っていくことを決心している。

我々が後世へ残すべき贈り物は、「どこまでも謙虚に囚われを超えていく生き方」だと考えている。どこまでも謙虚に囚われを超えていくという自己革新の道が地球レベルに広がれば、地球環境問題も種々の紛争や対立なども自ずと解決されるはずである。気づいた時には、いつの間にか解決されていたという日が来るのではないかと思う。そして、この自己革新の道が世々代々のものとなれば、自ずと世々代々の幸福を実現できると私は考えている。

## 註

1) 宇宙最古の光〈宇宙マイクロ背景放射〉の全天観測による。

2) 〈自発的対称性の破れ〉とは、対称性が必ず自発的に破れるという理論である。対称性とは、調和がある状態のこと

である。

#### 引用文献

伊東俊太郎. 2016. 文明の転換期—人類の過去と未来. 東洋学術研究 55(1): 114–131.

榎根勇. 2007. 統合学としての新しい環境学. 愛知大学国際中国学研究センター. Pp. 1-23.

Moody R. 1975a. Life After Life: The Investigation of a Phenomenon, Survival of Bodily Death. Mockingbird Books, Marietta, GA.

Moody, R. 1975b. Life After Death. Mocking Bird Books, Atlanta, GA.

Ring, K., Valarino, E. 1998. Lessons from the light: What we can learn from the near-death experience. Persus, Reading, MA.

Vilenkin, A. 1982. Creation of universes from nothing, Physics. Letters. 117B: 25–28.

(あきやまともひろ 京都大学大学院教育学研究科)